

Performing Arts Review (18)

戀とは必ずうつろうもの、でもそれをくり返すおとこの哀れさ 狂言の大曲『花子（はなご）』

平成22年8月17日 中野希也

あらすじは「女と逢うために、“今晚は座禅をするから近づくでない”と妻に言い、その実、自分の身代わりに家来に座禅させ外出する。翌朝、上機嫌で鼻歌交じりで帰宅しのろけ話をする、なんと女房が座禅の衣をかぶっており、とっちめられた」というものである。

私が何故興味を持ったかという二つの理由がある。

1 主に、主人と家来が演じる狂言では、男と女は、数少ない主題である。抑々、「哲学者であるおとこ」と「詩人であるおんな」の間に「をかしみ」の感情がおこるのであろうか。常にクライシスと言っていい男女間に「滑稽さ」が生じるのであろうか

2 つぎに、この一見他愛ない痴話喧嘩のような劇が、なぜ狂言の中でも難曲といわれているのだろうか。

主人は、美濃の宿で馴染んだ花子という優美な女が忘れられない。花子はまた男を慕って上京してきたので何とか再会したいが、妻はたいへんなやきもちやきなので男は一計を案じて夢見が悪いので諸国の寺々に詣りに出たいと言う。妻は、夫と長い間離れているのは嫌だと言ひ張り、どうしても承知しない。それでも男は、持仏堂に籠もって一晩座禅することを何とか承知させた。男は家来の太郎冠者を呼ぶ。

男 「身（私）は今晚逢いに出かけるが、おまえに頼みたいことがある」

冠者「是はまた、改まったことをおっしゃるではないですか。何なりと仰せ付けて下され」

男 「他でもないが、妻には“一晩座禅をする、その間は、身の前に顔をだすでない”と申し付けた。お前はこの座禅ぶすま（座禅するときに頭からかぶる衣）をかぶって座禅をしてくれ。もし、妻が来て何かを言っても、頭を横に振って決してものなんか言うでない。絶対にばれないようにしてくれ」

冠者「それは困った。もし、露見したら奥様は私を打ち殺すでしょう。このことばかりは、できません」

男 「なに、お前は俺が恐ろしくなくて、妻をおそれるのか。切って捨てよう」

冠者「お待ちくださいませ。殿様が恐いのには決まっています。仰るとおりにします」

男 「間違いないな」

冠者「嘘は申しません」

男 「それでこそ、わが家来じゃ。

こう言ったのも花子様逢いたいのが故じゃ。

さあ、この座禅ぶすまをかぶってみよ。

よし、身は出かけるぞ。絶対、口を開くなよ」



妻 「殿様は、座禅をすることになり私に暇をくれた。その間、湯も水も飲まないと言われたが、あまりに気の毒だ。座禅ぶすまをかぶり、さぞ窮屈な思いをしているのに違いない。

まだお若い身の上なのに何の修行をなさっているのだろう。そんな無茶ことをなされると、体に障るでしょう。一切、近づくなと仰せられたが、心配なのでよそながら様子を見よう」

妻 「一言も仰らないで、頭ばかり振っていらっしゃる、どうしたのですか。さあ、ぶすまを取ってあげましょう」

冠者 「あゝ、お許してください」

妻 「お前は一体ここで何をしているのだ。殿様はどちらへいらっしゃったのだ。言わなければ、打ち殺すぞ」

冠者 「あゝ、言います、言います。命だけはお許してください」

妻 「早く言え。腹の立つことじゃ」

冠者 「殿様は花子様のところへ」

妻 「このばか者が、花子様だと」

冠者 「いや、花子のところですよ。」

このぶすまをかぶっておれと仰られて

出かけたのです。私が断ると刀を抜いて

切ると言うのです。仕方なく従ったのです。

命だけは助けて下さい」

妻 「お前は嫌じゃと言ったが切ろうとしたので、言う通りにしたのか」

冠者 「そうです」

妻 「それなら許そう。お前に一つ頼みたいことがあるが聴いてくれるか」

冠者 「奥様の仰ることならなんなりと。命なりとも捨てましょう」

妻 「それならば、その座禅ぶすまを私に着せてくれ。お前と同じようにな」

冠者 「と、とんでもないことを。殿様が帰られたら、私を殺すに決まっています。是だけはお許くださいませ」

妻 「お前は殿がおそろしくて私は恐くないのか。それなら打ち殺そう」

冠者 「いやいや。着せますとも」

妻 「男の姿に見えるか」

冠者 「立派な男に見えます」

妻 「でかした。かわいいやつじゃ。お前は実家に帰っておれ。殿の機嫌が直ったら呼びに行くぞ」

冠者 「畏まりました。さてもさても、情けないことに会ったものじゃ」

夜が明け、男が小袖をうち掛け烏帽子も身に着けず放心の体で小歌(小歌節を駆使する狂言謡)を口ずさみながら登場。

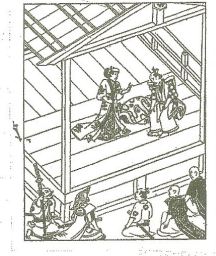
小歌～綾の錦の下紐は 解けてなかなかよしなや 柳の糸の乱れ心 いつ忘れぬ

(美しい下紐がひとりでに解けて、かえってどうしようもなく思うばかり、柳の糸のように心は乱れて、どうして忘れることができようか)

～はるばると送り来て 面影の立つ方を 振り返れば 月細く残れたり名残惜しやの

(はるばると送って来て、姿が目には浮かぶので、そちらを振り返ると、空に月が細く残っている。名残惜しいことだ)

後朝(きぬぎぬ)の別れがいとおしくて、ついついひとりごちてしまった。俺が申し付けたとおり一人さびしく座っているではないか。さあ、帰ってきたぞ。なんで黙っているのじゃ。さぞ窮屈であつたらう。一部始終を語ろうぞ。



向こうに着くとなにやらひっそりとしておる。そっと差し寄って内の様子を聞くと、花子様
が漠然と仰った。

～灯火暗うして 物の寂しき折節に 君が来たろうにや

(灯火暗く、何か寂しい時に、君が来たのだろうか)

花子が自分を「君」と呼んでくれた。なんとありがたいと思って妻戸（家の端にある両開き
の板戸）をほとほと叩くと、またこう仰った。

～いとど名の立つ折節に 誰そや妻戸をきりぎりす

(それでなくとも噂になるのに、誰が妻戸をきりきりと開けるのか。「きりきり」という音
から「きりぎりす」を言い掛ける。)

身も返歌をした。

～雨の降る夜に 誰が濡れて来ぞの 誰そよととがむるは 人二人待つ身か

(雨の降る夜に誰が濡れてくるものか、誰だどとがめるのは人を二人待っているからか。)

そこで内より花子様だ出てこられて、身が手を取りて、奥の間に連れて

「さてもさても、雨が降っているのによう来てくれました。まづ上をお脱ぎなさい」と着る
ものを着せて下さった。

色々の積もる物語、舞ったり謡ったり、遊ぶほどに、はや夜明けの鳥が鳴いた。

「まだ半時（一時間）もせぬのに、夜明けの鳥が鳴いた、もはや御暇しなくては」と言えば
花子様はこう言った

～ここは山陰森の下、ここは山陰森の下 月夜鳥はいつも鳴く しめておよれの夜は夜中

(ここは山の陰の森の下、月夜に鳥はいつも鳴く、抱きしめておやすみなさい、まだ夜中)

身は「夜も明けますれば、人も見ます、さあ帰らねば」と申すと

「それは本心ではなかろう。奥方が見たいのであろう」と仰った。そこで身が妻の姿を小歌
に謡った。

～人の妻見てわが妻見れば 人の妻見てわが妻見れば 深山の奥のこけ猿めが 雨にしよぼ
濡れて ついつくぼうたにさも似た

(他人の妻を見てから自分の妻を見ると、深山の奥の老いた猿が、雨に濡れそぼってじっと
うずくまった姿によく似た)

それを聞いて花様はどっと笑われた。

またこの小袖は花様が別れしな思い出すよすがとしてくれた物であるが、妻が見たらよ
いことはあるまい。ただ捨てよう。

～捨ててもおかれず 取れば面影に立ちまさり 起き伏し分かで枕より 跡より恋の責め来
れば せん方涙に 伏し沈む事ぞ悲しけれ

(捨ててもおけず、手に取れば姿が目浮かび、起きていても寝ていても枕から足元から恋
の苦しみが襲ってきて、どうしようもなくただ泣き崩れるばかりであることが悲しい。)

ともかくもお前にやるから決して妻に見せるでないぞ。さあ、座禅ぶすまを取れ、身が代わ
るぞ。

妻「ヤイ、わ男」

男「……」

妻「なに、妻に見せるなど、よい座禅じゃの そなたの座禅は」

男「はつ、是は一体どうしたことだ」

妻「云う事は有るまい」

男「こらへてたもれ、御免々々」

妻「やるまいやるまい」(遣るまいぞ。逃がしはしないぞ)

まず狂言の歴史をひもといてみよう。

昔昔、天照大御神が弟君の乱行に怒り天の岩戸にお隠れになり、真の闇になって八百万の神々や人々が困り果てた。何とか御機嫌を直してお出まし願いたいために天宇受売命が歌に合わせて舞を舞った。美しい歌に惹かれてそっと身を乗り出した隙に力の強い神様が岩戸を外した。この謡や舞が代々伝えられ「さるがく（猿楽・申楽・散楽）」へと発展し、更に、田植などの農耕神事に笛・鼓を鳴らして歌い舞った田楽が影響を与え「能・狂言」のもとになった。鎌倉時代に入ると、滑稽な芸が主体だった猿楽は、まじめな歌舞劇へと移行し室町時代の初期には、観阿弥・世阿弥父子により「能」として大成された。一方、猿楽本来の滑稽なせりふ劇も「狂言」と呼ばれるようになり江戸時代に入ると武家の式楽に定められ、安定した状況の中で洗練され固定化されてきた。狂言方には和泉流（野村万蔵家、野村万作家、和泉家等）と大蔵流（大蔵弥右衛門家、山本東次郎家、茂山家等）がある。



以下山本東次郎の著した「狂言のことだま」（玉川大学出版 2002）を傍らに置き鑑賞したい。著者は昭和12年生まれ。17年に初舞台46年「花子」を披く。47年四世東次郎を襲名。古典芸能の家元が自ら語りかけるのは極めて稀有である。この本を著す動機についてこう語っている。

“狂言は、ひたすら笑いを追求しようというものではありません。狂言は人間の愚かしさを鋭く厳しく見つめます。しかし狂言は、それを糾弾し、暴露し、愚の責任を迫及したりすることなく、人間の存在そのものを慈しみを持って見つめています。なぜなら、狂言は、人間の本質が「善」であると信じているからです。そして、人間とは何か、人生とはいかなるものか、人はどのように生きていくべきか、人がこの世に真に生きるために必要な問いかけ、根源的な問いかけを提示しているのです。苦しいことから目を背け、刹那的な快樂に自分をごまかしている世の中であって、そうした風潮を断固拒否し、「人間とは何か」という問いに真摯に向き合う人に、私は是非狂言を見ていただきたいと願っています。”

東次郎の渾身の言葉に耳を傾けよう。

『花子』は、「極重習 ごくおもならい」といって、年齢的に精神的に技術的に、高いレベルに到達した人でなければ演じることの許されない曲である。なぜ気軽に演じることが許さないのか、その理由を問うことは、狂言の表現や本質を問う上でたいへん重要なことである。

美貌の愛人との再会を果たして、夢のような一夜を過ごし、夢覚めやらぬ心地で帰途についた男が、再び舞台に登場します。このときの装束は「枝垂れ桜模様」の「紅地唐織」に、「紺地に藤と八つ橋模様」の「精好素袍」（厚手の絹地）で極めて華麗で豪華な品で他の狂言では決して使うことはできません。それはこの曲の格調を高めるためであると同時に、この派手な装束を形良く品良く着こなすだけの風格を得て初めて演じることが許されるということでもありましょう。

狂言としては珍しく情緒的な場面を謡によって表現するのは、甘美な戀に酔いしれる心情を訴えるだけではありません。ともすれば嫌らしく見苦しいものに陥りかねない、男女の逢瀬、ラブシーンの生々しさを封じ、能舞台にふさわしい格調と品位ある表現を保つため、それゆえにこの謡は、非常に難しい、微妙な抑揚をつけた節回しを用い、技術的にも精神的にもある境地まで到達した者でなければ、演じることのできないように作られているのです。これ

は伝承の中で作り上げた規制であり、抑制でもあり、また難しさを克服するために費やす緊張感と、より高いところを求める向上心をすり替えさせる目的と私は考えております。

妻は「わわしい（うるさい、口やかましい）女」ですが怖いばかりではありません。

「夢見が悪いので仏詣したい」という夫に、「あなたほどのお方が、夢などを心にかけさせらるると申すことがあるものでござるか。夢と申すものはかないもので、合うも不思議、合わぬも不思議、ただ何事もかない夢の浮世でござるによって、そつともお心をかけさせられぬがようござる」というしっかりした人生哲学を持っている妻です。

「持仏堂へ閉じ籠もって、七日七夜の座禅をしよう」という夫に、「わららがおそばに付いていて、湯も茶も取って進みましょうぞ」という、かいがいしく世話焼きの妻です。

しかし、人間とは勝手なもので、世話は焼いてほしけれども、あまり始終側にいて、あれこれ言われるのはうるさくてたまらないと思うのです。さらに言えば、どんなによくできた妻でも、「妻」は「夫」にとっては「現実」、それ以外の何者でもありません。それに対して「花子」はまさに「夢」そのものなのです。

夫がさかんに褒めそやす「花子」も、ほんとうに夫の言うとおりの「いい女」であるのかどうかはわかりません。戀に眩んだ目には、あばたもえくぼ、しかし、それはどうでもいいことです。夫を酔わせているのは、「花子」という女性の見た目の美しさや気立ての愛らしさではなく、「花子」という「夢」なのです。話題の中心である「花子」は結局最後まで舞台上に登場しません。それは、「花子」があくまでも男性にとっての究極の理想の女性の象徴なのです。

実はこの妻だって以前は、夫にとって「花子」であった、夢のような存在であったと思います。それが生活を共にし、長く連れ添っているうちに、「花子」ではなくなり、現実の世界の存在となっていく。それが人生であり、それはそれで納得し、満足はしていても、時折、心のどこかで何か夢のようなことを考えてしまう、それも人間の弱さ、愚かしさなのでしょう。

最後の場面で、夫の浮気に逆上した妻は、被っていた小袖で散々に夫を打ちます。これこそ妻は心の奥底では夫を許しているということの表れなのです。なぜなら、いくら小袖で打ったところで、痛くもないし怪我もしません。

狂言は事件を演じません。「夫と妻と夫の愛人」の三角関係、当然事件に発展していくようなものをその遙か手前で押さえ、凄惨な事件に発展していく可能性のある心の奥底の葛藤を拡大肥大する以前に、本質でお見せしたいのです。浮気した夫を怒鳴りつけ、小袖で打ちながら、心の中で許している妻の姿に、人間のいじらしさと優しさ、そしておおらかさを見るように思います。愛情の問題という、最も根源的な、そして最も濃密な人間関係、それだけにとすれば、最も醜悪な姿を晒しかねない人と人との関係を、狂言は「極重習」の習いによって、幾重にもくるみ、包み込み、大切に丁寧に描こうとしているのです。